

## 声が響く、知の森へー世界の図書館事情

吉田 右子(筑波大学教授)

報告者：今村信隆(北海道大学文学研究院)

2024年度に実施した「となりのしばふ」シリーズ(全5回)は、ミュージアムと近い諸分野の専門家を招き、対話を通じて学ぶことを目指すものでした。

この「となりのしばふ」というタイトルには、主に2つの想いが込められています。1つは、近くて遠いジャンルの方々と、風通しのよい議論を交わしたいという想いです。他分野との議論を、しばしば、「異種格闘技」のような言い方でたとえることがあります。ただ、わたしたちが目指したのは、格闘技のような討論、勝ち負けを決めるためのディベートではありませんでした。そうではなくて、見晴らしのよい芝生の上で隣人同士が語り合うときのような、穏やかな、リラックスした語らいが、このシリーズの理想でした。あえてひらがなで、やわらかなタイトルをつけたのは、そのためです。

タイトルに込めたもう1つの想いは、一言でいえば、健全に羨ましがろう、ということです。「隣の芝生は青く見える」という成句は、基本的には、羨望する気持ちを揶揄している場合に用いるものだと思います。しかし本シリーズでは、羨望をポジティブにとらえ、今後のきっかけにしたいと考えていました。主催者であるわたしたちはミュージアムに軸足を置いているですが、

ミュージアム以外の分野の素晴らしい活動や最新の考え方に触れ、よい意味で憧れ、学んでいくことを目指したわけです。

そのような点を考え合わせると、本シリーズの初回の講師として筑波大学の吉田右子教授をお迎えできたことは僥倖であったと思います。吉田氏は、穏やかながらも熱の伝わる語り口で、聴衆を大いに羨望させる北ヨーロッパの図書館の潮流について教えてくださいました。しかもそのお話のキーワードは、ほかならぬ、図書館における会話・対話でした。

吉田氏の専門は公共図書館論です。大学院生の頃は公共図書館発祥の国であるアメリカを研究のフィールドとしていましたが、その後、2005年から北欧の図書館の研究に着手したといいます。最初に衝撃を受けたのはデンマークの図書館だったそうです。館内で自由に飲食やおしゃべりをする人びとの姿、大画面・大音響でテレビゲームに興じる若者たち、放課後の時間を過ごす難民の女の子たち…。こうした図書館のあり方に心を動かされ、吉田氏はその後、ノルウェー、フィンランド、オランダといった諸国の図書館にも調査の範囲を伸ばしていきます。

お話の中で吉田氏は、旧来の日本の公共図書館と北ヨーロッパ諸国の公共図書館とを比較するポイントをいくつか挙げられました。日本の公共図書館は、図書館の環境がもたらす知的緊張感という点でも、静寂の中での自己との対話という点でも、他国の図書館に引けをとりません。また、優れたレファレンス・サービス等を通じて利用者に答えをもたらすことも、日本の図書館が得意とするところです。しかし、知的緊張感は得られても、文化的刺激は充分でしょうか。自己との対話が重視される一方で、他者との会話は軽視されてはいないでしょうか。答えを得る場ではあっても、問いを創る場になりえているのでしょうか。このように問いかけながら吉田氏は、「文化的刺激」、「他者との会話」、「問いの創出」こそが、日本の図書館にはまだ足りていない、北ヨーロッパの図書館の特色だと指摘します。

実際に、吉田氏が紹介してくださった数々の事例は、図書館のひろがりと可能性を具体的に教えてくれるものでした。すべては紹介できませんが、少しだけ、拾ってみます。飲食は基本的にOK。おしゃべりも、携帯電話での通話も可。ペット同伴もできる。閉館時間に住民が自分のマイナンバーカードで入館する光景も、特段珍しくはないそうです。健康増進を目的にエアロバイクを設置している図書館。難民の家族のためにミシンを大量に配備する図書館。メンタルヘルス・薬物依存症の専門クリニックや職業紹介所など同居する図書館。あるいは、政治家と対話出来るデモクラシー・コーナーがある図書館も、北欧ではよく見かけるとのこと。

とはいえ、北欧の図書館も、最初からこのような賑やかさだったわけではありません。吉田氏によれば、1960年代がターニング・ポイントであり、そこから時間



をかけて現在の図書館像が形成されてきたといいます。その背景には、学びには対話が欠かせないという北欧諸国の伝統や、文化的平等や社会的公正を尊ぶ姿勢があったというのが吉田氏の見立てです。このような歴史的な経緯を経て、今日、ノルウェーの公共図書館法(2013年)では、図書館が会話と議論のための場であることが掲げられているといいます。この法律の文章を「超訳」して吉田氏は問いかけます。

「ここは図書館だよ。なんでおしゃべりしないの？」さて、ひるがえって、ミュージアムはどうでしょうか。吉田氏の講演を受けて後半のディスカッションでは、ミュージアム関係者はもとより、大学図書館、学校図書館、文書館、公民館等の関係者も参加して、多角的な議論を行うことができました。ミュージアムとライブラリー、双方の専門家が集まることで、普段は自明視されがちな各機関の専門性や課題について問い直す場になったと考えています。「となりのしばふ」にお邪魔して語り合う、楽しくも有益な一日でした。